

中島川水辺の表情(七) とんびのわしづかみ

古屋 陸夫

愈々夏休み、さあ！子ども達の季節でもある。ある日曜日のこと、当方も朝のラジオ体操のお相伴にあずかろうと中島川近くの公園に出かける。何時も見掛ける親子連れや祖父母連れの姿が一組もきていない。当てがはずれ、それでも未練がましくキョロキョロしていると、いる居る子どもが一人、首から判取帳(体操の出席表か)をぶらさげ、所在なげにその辺をうろろしている。「坊や！今日は日曜日で体操は休みなんだね」と、声を掛けると、否定も肯定もしないで当方をみたが、まだ眠気の覚めない細い目付きで、ぼんやりとしている。きつと親御さんから、「ラジオ体操に行っておいで」と、表に出されたのであろう。この子の様子からそう判じられる。

「坊や、何年生なの？」「一年生」と、小声で単語だけを呟く。「体操は休みなんだね、日曜日は」昔は日曜こそ体操があつたようだが、それは私達世代のこと、時代は変わったのか。

「めがね橋に行こうか」と誘うと、怪訝そうな顔をして、ぶらぶら着いてくる。母親から「知らない人には着いて行つては、駄目よ！」との教えは、言われているのであろう。そんな気配は十分であり。だが、めがね橋はすぐ近い。総じて中島川公園と言う。

中島川沿いビルの上の「とんび」(北川るみ子 撮影)

中島川公園は晴れ晴れの夏真っ盛り、蝉の声頻りである。公園の樹上がやたらと騒がしい。二人は期せずして樹上天空を見上げる。すると樹上の彼方ビルの上に、一羽のとんびが、こちらをいわくあ

りげに窺っている。何故だろう。

子どもは「わし(鶯)だ!!」と、大人に同意を求めるように積極的に自ら発言する。いやわしじゃない、とんび(鶯)だと、訂正しようかと思つたが、いやまてよ！「わし」も「とんび」も猛禽類、同類である。折角の子ども知識を混乱させてはいけぬ。ここは知らん顔して「うん」と、かぶり振つた。「わし」などこの近辺に居るわけないのである。子どもは凶鑑か何かで得た知識であろう。小学一年生の尊い知識である。と思ひ遣つた。すると、いまこの平和な中島川で、一匹の虫の運命の推移に遭遇するのである。蝉がひよい、と飛び立ち、隣の樹木に移ろうとした。この僅か寸秒の間に、ビルの上の「とんび」(この子にとっては「わし」が、目にも留まらぬ急降下で、あの飛んでいる小さな蝉を、あつという間に捕らえ、さつともとのビル上に戻つたのである。次に「とんび」は捕らえた蝉を突いて、パクパクと食べているのだった。

「とんび」は、五〇メートルの上空から、下を走るネズミの姿をみる事が出来るという。その「とんび」が天性の視力と、素早い滑降の早技を持つ猛禽振りを、いかに発揮した一瞬でもあつた。

この小振りな蝉の飛行を察知し、しかも足つめで掴んでしまふ、この早技。あれはとんび掴みとも言われないし、鷹掴みとも言われない。あえていえば鷹掴みというのではないだろうか。

子どもがあれは「わし」だといったのも、このあたりから類推すると、「わし」だといったことが正しかつたのかと、この可愛い子どもを前に、考えが川波のようにゆらゆら揺れた。ある夏の中島川原でのひと時でありました。(九州文学同人)

歌集『縁』の発刊によせて

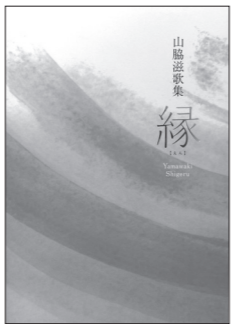
山脇 滋

私と短歌との出会いは、不思議な縁に導かれたといえる。

東京での商社勤務を終了し、郷里長崎でのんびりと思つていた時、旧友の誘いで生月島の「かくれキリシタン」を訪ねる事になった。この時、はからずも現地で吟行の短歌グループの方々と同行する事になり、見学会ののち私にも短歌を作るようにと勧められた。この時、私は無手勝流で次の短歌を作つたところ褒められた上、「是非短歌をはじめなさい」と勧められ、「NHK短歌入門」のパンフレットを渡された。

いまもお納戸のマリアの掛けものはぞろり着流し髪結いてあり

それから程なくNHK長崎短歌大会があり厚かましくも参加させて戴き応募したところ入選の栄を得たのです。この時の選者が上川原紀人先生だったので。以来しばらくNHK短歌通信教育を受け、更に上川原先生のお教えを頂き「あすなる」の同人に参加させて戴きました。



○七月と言えば七日の七夕、十三日よりの「お盆」、十六日は「ヤブ入り」「野母の盆おどり」と記してあるが、現在の長崎地方の「お盆」は、八月十三日より十五・十六日となっている。

○現在の七月の行事には「飯香浦の地蔵盆」があり、長崎市無形文化財に指定されている。地蔵盆は二十三日より「ソーメン飾り」の準備に始まり、其の日の夕方、大田尾地区では「ソーメン飾り」を「上ノ地蔵堂」に「送り念佛の鐘」の音にあわせて山道を担いで登つて行くのは有名である。二十四日は早朝より上下の地蔵堂で始まる「念佛供養」や特色のある「飾りソーメン」を拝見することが出来る。

○然し、長崎の人達は毎年七月二十三日と言えば、あの長崎大水害を思い出す。今から三十二年前の七月二十三日夕方六時半頃より集中豪雨は長崎市内を中心に古賀・矢上・茂木地区にまで其の被害は拡がっている。其の被害は死者・行方不明二六二人、浸水家屋約二、五〇〇棟、道路被害一、二三ヶ所等と記録されている。

○中島川の石橋の大半も流されていた。勿論、「飯香浦の地蔵盆」も大なる被害を受けられた由の連絡があつた。

生月島での短歌との出会い、あすなる誌との出会い、いずれも偶然が重なりながら、短歌とご縁をいただいたことは、退職後の人生に彩りを与えてくれる幸運でした。

今般九十歳を迎え、その記念として歌集出版を決意したのは、上川原先生の勧めもあり、私の人生の後期を纏め、そしてなによりも子や孫たちが、縁の尊さの一部でも私の背中に感じてくれればとの思いの出版であり、歌集名を『縁』といたしました。

私は戦前における父の死去、母親の原爆病での死亡や、幼い弟妹四人の進学と生活などへの苦勞もありながら、亡つた父母のお蔭でさまざまな素晴らしい縁に恵まれ、弟妹達も希望通りの暮らしとなり、私も三人の子、三人の孫に恵まれて一応人並みの生活ができるようになったのです。その上短歌という心の支えにご縁があり、なんと幸せな老後であるうと感じています。これからは私の心の揺らぎ、願望、喜怒哀楽のすべてを、見失うことなく短歌に盛り込みながら、人生を完うしたいと念じている次第です。

皆さまとご縁に心から感謝しつつ。平成二十六年四月(あすなる同人)

○次に七月と言えば各学校の夏休み、海水浴場が賑やかでした。

○今月ご寄贈いただいた書籍

一、土肥原弘久氏より自著の『長崎くんち』。自刊行。多年「長崎くんち」に参加された実感より全てが構成されており、長崎の民俗文化を良く照会されている著書であつた(二千円十税)

一、長崎商工会議所より『長崎歴史文化観光検定試験用の「改訂新々版」のテキストブック』。二級・一般用二冊をいただいた。毎回、検定受験の人達が増加するので第五版として発刊された由。

一、長崎国際観光コンベンション協会より『長崎さるく 公式ガイドブック』。長崎には次の四つの「あるき方」あり。一、食さるく 二、学さるく 三、通さるく 四、遊さるく。大いに参考となつた。

一、長崎歴史文化博物館より 『史料叢書六「福濟寺 関係資料」山号、寺号、伽藍、唐僧他」長崎唐寺 関係資料として保存すべき資料であつた。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

